

父の視点で描く 日本の戦争

台湾少年工の記憶 次代へ継承

台湾文学を代表する一人、呉明益さんの邦訳が相次いでいる。近刊『眠りの航路』（倉本知明訳、白水社）は作家にとって最初の長編。英ブッカー国際賞の候補に入り、高く評価された代表作『自転車泥棒』（天野健太郎訳、文春文庫）につながる物語で、原点といえる作品だ。日本の歴史にも深く関わるこの長編を中心に、オンラインで話を聞いた。

邦訳相次ぐ作家・呉明益さん

1971年、台北生まれ。97年にデビューした。邦訳が最初に出たのは2015年の『歩道橋の魔術師』（天野訳、白水社）。80年代の台北を舞台に、幻想と懐かしさが入り交じる連作短編集だ。今年4月には気候変動や環境汚染を寓話に包んだ『複眼人』（小栗山智訳、KADOKAWA）、

10月には短編集『雨の島』（及川茜訳、河出書房新社）も刊行された。著書は英語、フランス語、トルコ語など10カ国以上の言語で翻訳されている。

『眠りの航路』は台湾では07年刊行。睡眠に異常を来した「ぼく」と、少年時代の父の記憶が重なってゆく。失踪した父はかつて少

年工として日本軍の戦闘機製造に関わっていた。太平洋戦争末期に海を渡り、「三郎」という日本名を与えられて、「天皇の本当の赤子になって」「白いお米を食べられる」ことを夢見ていた父は、戦後故郷に戻っても日本語を使い続け、「日本紳士」と周りに冷笑された。

呉さんの父親も台湾人少年工の過去があるという。「私たちと親の世代では受けてきた教育が違う。そこから生まれる考え方も違う。見知らぬ世代を観察するように向き合いました」。

世代を超えた記憶の継承は、呉さんにとって大きなテーマだ。「上の世代が語る戦争は、私たちの世代にはうそのように聞こえますが、それこそが彼らにとっての現実でした。私は親の世代に不満を持っていましたが、この小説を書くことでむしろ、私が彼らを理解

できていなかったと気づきました」

台湾人の少年に、あの戦争はどう見えたのか。慣れぬ寒さに苦しみ、宿舎で仲間と語り合う。戦争という日常の中にたくましい青春があった。「私は戦争を経験していませんが、台湾では常に戦争になるかもしれないと注意喚起されてきました。戦争はどう見ても残酷なのに、映画やゲームで楽しんでいる。美をもちたすこともある。戦争という残酷な経験から人類は何を得ているのか。疑問と困惑をずっと感じていました」

どの作品にも、中国語と台湾語が混ざる。台湾の言葉はあえて意識的に多用しているという。本書の倉本訳では、中国語を標準語で、台湾語を訳者の故郷である瀬戸内の方言で読ませている。フランス語版では台湾語にクレオール語をあてた訳者がいたそうだ。

「私の母語は台湾語ですが、教育は中国語で受けてきました。言葉がハイブリッドであることは、その文化が動態的だということ。台湾の言語状況は非常にユニークです。そのユニークさが、新しい文化を作り出すと思っています」

（中村真理子）



本人提供